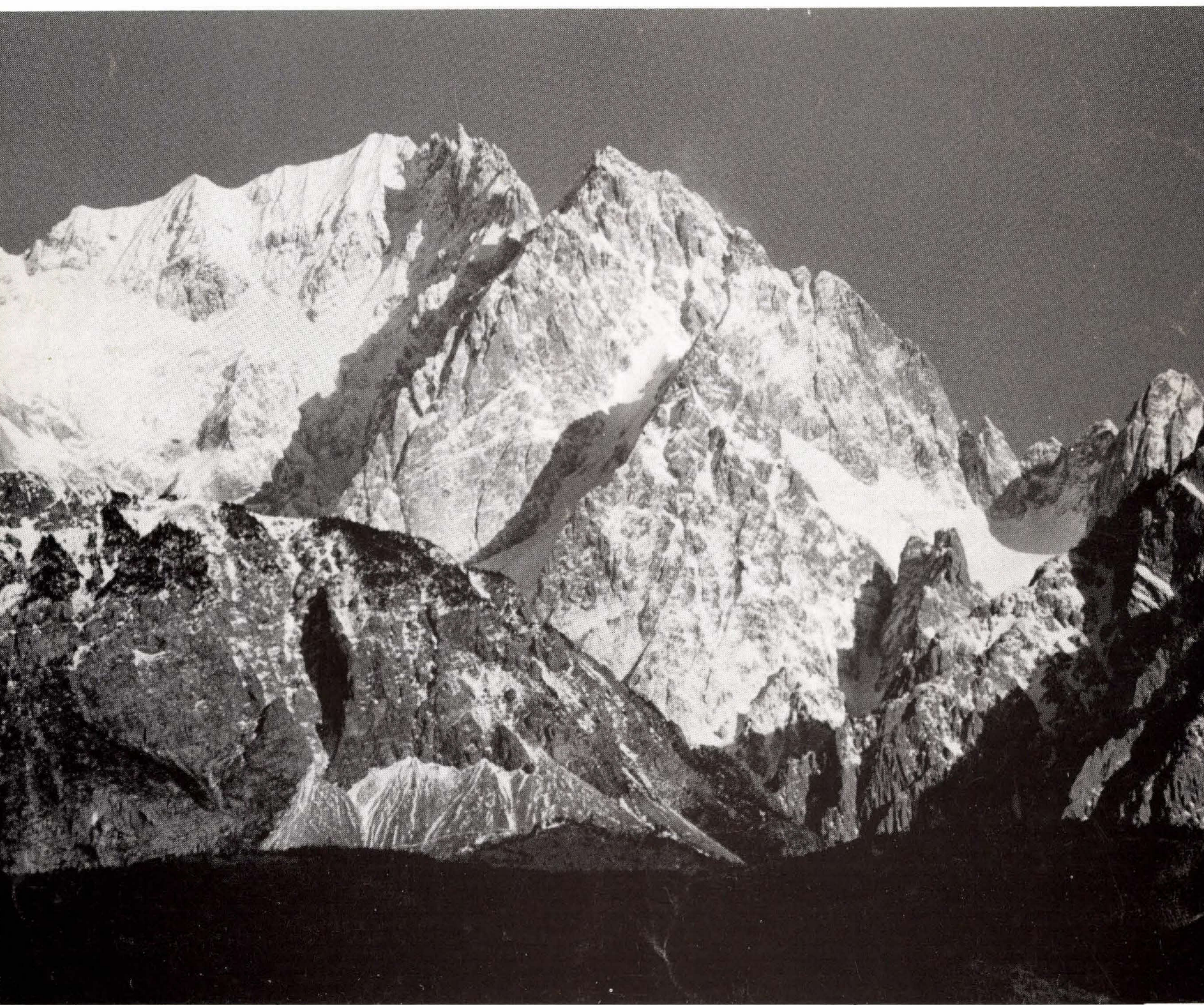
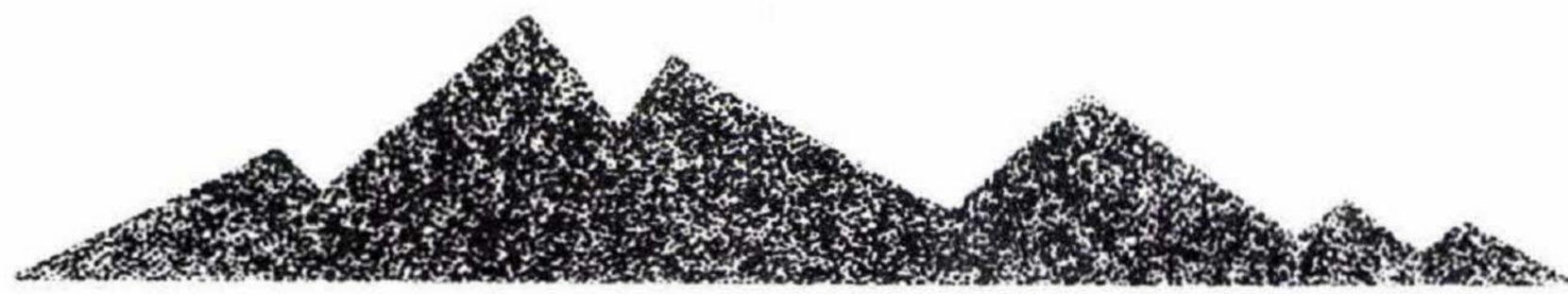


針葉樹会報

1990. 6. 第75号



発行日 1990年6月25日	針葉樹会報 第75号	編集人
発行所 針葉樹会		〒194-01 町田市三輪緑山1-17-13
印刷所 篠田印刷		近藤 泰



目次	
中国・雲南の旅（一九九〇年四月）	
（玉龍雪山とその周辺）	中村 保
ひとのいない山（その三）	望月 達夫
老スキーヤーの近況報告（上）	久保孝一郎
小谷部全助、森川真三郎両畏兄の追想	宮城 恭一
どうにも分かりませんが	柿原 謙一
香港針葉樹会	引地 真
一橋山岳部の存続問題	
についての報告及びお願い	西牟田伸一
一月のガンジャ・ラ越え（上）	
ランタン谷からヘランブーへの山旅	中島 寛
	17
	14
	13
	12
	11
	8
	5
	1

中国・雲南の旅

(一九九〇年四月)

玉龍雪山とその周辺

中村 保

雲南へのあこがれは長い間胸の底で眠っていた

ましたが、香港に在住する機会を得て、ようやく実現することができました。政治的理由でチベット自治区に接する山岳地域は外国人には解放されておらず、山に関する資料は殆んど無く、今もって二〇世紀初頭から前半にかけて、この地を精力的に訪れたキングドン・ウォードの記述がその不正確さにもかかわらず頼りになるところです。倉知さんの翻訳した「青いケシの国」、望月さんが抄訳された「雲南の雪山」等で予備知識を整理する以外、最近赴いた人の局所的な話を除いては、これと言ったまとまった情報は得られない状況です。勿論、部分的には玉龍雪山は数回に亘る攻撃の末、アメリカ隊により一九八七年に登頂され、また梅里雪山は近年脚光をあびており、ここ数年登山隊が送り込まれて

いますが、地図も含めて概括的な文献はなく、政治的障碍のお陰もあって東チベット、ミャンマー(ビルマ)との国境地域は地図の空白部です。それだけに未知の土地への誘惑を感じさせるところです。

今回の旅行は雲南の奥地への旅がどこまで可能なのか、偵察の意味も兼ねて外国人に解放されている玉龍雪山の麓の麗江地区に入ってみることを目標にして計画をたてました。別段のコネもないので、香港の中国旅行社に手配を依頼し、四月五日から十六日までのプログラムをつくりました。行動日程は次の通りです。

四月 五日(木) 香港→広州→昆明

〃 六日(金) 昆明→大理

〃 七日(土) 大理→麗江

〃 八日(日) 麗江→石鼓→麗江

〃 九日(月) 麗江(玉龍雪山)

〃 十日(火) 麗江(玉龍雪山)

〃 十一日(水) 麗江(玉龍雪山)→大理

〃 十二日(木) 大理

〃 十三日(金) 大理→昆明

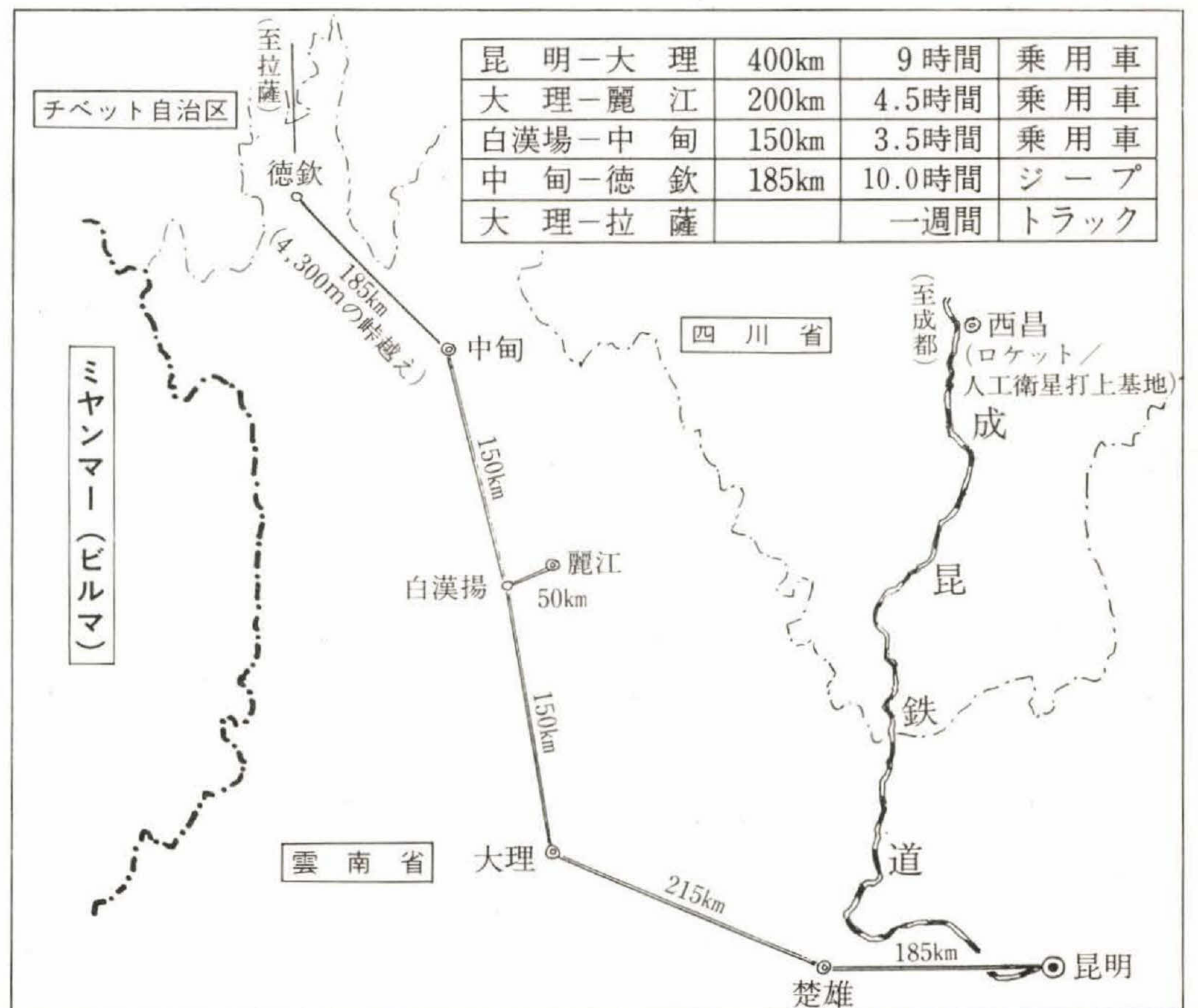
〃 十四日(土) 昆明→石林

〃 十五日(日) 石林→昆明

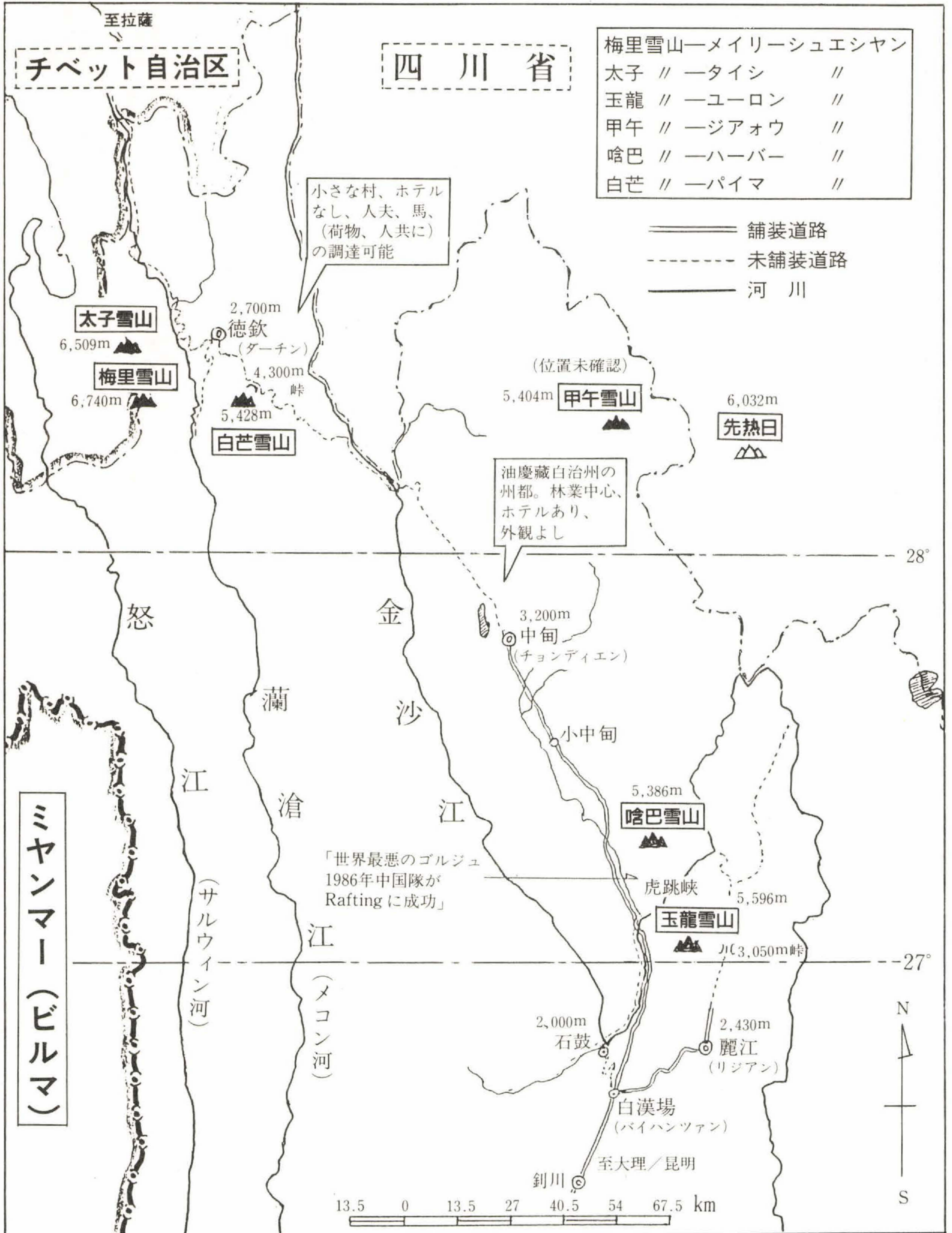
〃 十六日(月) 昆明→広州→香港

香港から広州へは直通列車で、そこから空路昆明に入りました。昆明から再び最終的に昆明

昆明-大理	400km	9時間	乗用車
大理-麗江	200km	4.5時間	乗用車
白漢場-中甸	150km	3.5時間	乗用車
中甸-徳欽	185km	10.0時間	ジープ
大理-拉薩		一週間	トラック



に戻るまで、全行程約二〇〇〇kmを専用トヨタクラウン・ロイヤルサルーンに、日本語ガイド及び運転手が十二日間専属で同行してくれました。行く先々で別のガイドがつき、麗江では三日間ジープを借り、全ての費用を含めて日本円で三万円でした。大変に安いと言います。よう。二人以上で行けば更に割安になります。標高一九〇〇メートル、常春の省都昆明を登



って山また山の雲南高地をぬって一路西へ昆明・ビルマ公路を一日がかりで大理に。この公路は往來のはげしい幹線道路であり、かつて中国国民党軍をサポートする役割を担った援蔣ルートでもあり、途中まで難工事で聞こえた成昆鉄道と平行している。

大理はロマンをかきたてられる土地です。宋の時代から元のフビライ汗によって滅ぼされるまで仏教の栄えた南紹国の都として文化の中心になったところ。現在は白族自治州の今も古都の風情を多く残す州都です。誇れる歴史ある少数民族の街であり、人々は豊かで落着きのある生活を営んでいます。若い女性も美形が多く洗練されています。街中での美容院の多いのは驚かされました。難民の集積地である香港人の、無愛想で他人に無関心な人達と違い、礼儀正しくホスピタリティーを感じさせる心休まる土地柄です。

大理から洱海（湖）を右に蒼山（四〇〇〇メートル級の連山、万年雪はない）を左に見つつ昆明、チベット公路を北上、自漢場で中旬を経てチベットに至る公路と別れて麗江高原に向かいました。車で二時間弱のところをキングドン・ウォードは四日間をかけて歩いていきます。麗江は納西（ナシ）族の中心の土地です。古くから独特の仏教文化をはぐくんできた少数民族の国であり、多くの学者の研究対象にもなってきた興味のある地方です。更に時代を遡ると特有

の形象文字が使われ古老の口伝で今日まで継承され文化財として保存されています。麗江の街から望む秀峯玉龍雪山は素晴らしいが、麗江の納西族の文化も今後の観光資源として、多くの人を引き寄せ得る奥行を持っていると思います。

このあたりはグレートヒマラヤの東端が、地殻変動の時代にねじ曲げられて南に高度を落しつつ果てる横断山脈の端に位置するところです。金沙江（揚子江の上流）が大きく屈曲して流れの方向を変えるまで、メコン河、サルウィン河の三つの大河が一つの山脈を距てて接して南北に流れる、地勢上非常にユニークな地域です。山高く谷深い地形が交通を著しく困難にし、住民の移動を封じ幾多の少数民族が生まれ、今日まで旧來の生活習慣が残されています。民族学者にとって垂涎的でしょう。ちなみに大理から一つ山を越せばそこはメコンのほとりであり、さらに一つ越えればサルウィンです。そのサルウィンも雲南からチベットへと上ります。二〇世紀のはじめキングドン・ウォード等英国人が雲南に入ったルートは、ビルマからバモを経て大理に至る道をたどっています。

玉龍雪山は金沙江が横断山脈を断ち切って水路をつくった、世界最悪のゴルジュ虎跳峡（タイガー・リープ・コルジュ）の東側の独立峰です。麗江高原の北に屹立する鋭角的な山容は他の雲南の山々とは異なり、その造形美、気品、

峻しさと三拍子揃った、山のイメージに関心のある者にとって秀逸なものです。中国で最も美しい山、中国のアルプスと言われているのもその容姿を一瞥すれば納得するでしょう。規模はペルーアンデスと同程度でしょうが、気象の不安定さは登攀をより困難にしていると思います。一九八七年に初登頂したアメリカ隊は天候の急変に苦戦した経験を生かし、技術的には難かしい直登ルートを短期決戦でアタックして成功しました。北側の尾根づたいの長いルートは最初一九八四年に日本隊が手をつけましたが、技術的困難さはさほどではないが時間がかかりすぎて、結局途中で悪天候に見舞われて敗退することを避けるためアメリカ隊は速攻ルートを選んだようです。アプローチの便利さを考慮すると、一九八一年まで未解放地区にあったとは言え、一九八七年のアメリカ隊まで登頂を許さなかったことは意外ですが、まだ北峰（約五四〇〇メートル）は未登のようです。トレッキングがてらに登頂を試みるには手頃な対象ではないかと思えます。

今回の目的地である麗江には四月七日から十日まで五日間滞在し、玉龍雪山にできるだけ近づき写真に収めるチャンスをつかいました。しかし晴れたのは一日だけでしたが、堪能することはできませんでした。通年のうち四月が天候が最も安定する時期と言われていますが、はじめの四日間は変化の激しい荒れ模様の天気です。山にお

目にかかれず、気圧計の針は一向に上る気配がなく、はるばる来たのに全くツイていないとあきらめて帰り支度をしていたところ、最後の一日だけ幸運にめぐり会えました。

麗江（標高二四〇〇メートル）から高原を雪山に向かって北へジープで約三〇km、山裾を右から廻り込んで玉龍雪山東面のアルペンのでもし、かもチベット牛の遊ぶ、針葉樹がまばらに生えている広々とした放牧地に出れば、そこに東面の雄大なパノラマが眼前に展開します。標高三〇〇〇—三二〇〇メートル、中国とは想像できない景観です。無風快晴のひととき、静謐な自然の大劇場の中でただ一人の観客として、時折牛の鈴の音を聞きながら、カメラのシャッターを押すのも忘れて陶然としました。騒々しくあわただしい「借りものの土地」に「借りものの時間」を生きる香港から対極の別世界に抜け出してきて、悠久の時の中で「本物の時間」を味わう無上の喜びを得ることができました。

山に関する情報は麗江で地区の体育委員会幹部の華さんから聴取しました。登山関係者と対応する唯一の人で、案内役も買ってでてくれジープで同行もしてくれました。断片的な記録をたよりに、記憶をたどっての説明ですので、正確さのほどは可成り怪しいところもありました。が、彼からの聞き書きと、既存の資料と合わせ、かつ帰香後、日本ヒマラヤ協会の山森さんに若干修正をしていただき添付の資料・概略図にま

とめました。不備で誤りもあると思いますが、雲南の山についての大きかな資料として、初歩的な参考にはなると考えます。

麗江に滞在中、ついでに石鼓まで足を延ばし金沙江の屈曲点を訪ねました。ここは中国共産党が捲土重来を期して苦難の行軍をした有名なロング・マーチ（長征）ゆかりの土地でもあります。金沙江は雨期に入る前で澄んだ水がゆったりと流れ、岸辺の新緑の映える柳が漢詩の情景を髣髴とさせるほどすがすがしく、小じんまりした石鼓の村落の雲南少数民族特有の土造りと瓦の家並、周囲の青々とした麦畑と菜の花畑が深い谷あいには調和しています。

実は今回の旅では玉龍雪山と吟巴雪山の間を切り開いて険悪なゴルジュを形成している前述の虎跳峽にも行ってみようと思案中に意図していましたが、許可に手間がかかるので断念しました。虎跳峽はラフティングの世界に残された最後のターゲットでしたが、一九八六年に中国隊が成功しました。特殊なカプセルを作りその中に入間が入って、河幅僅か三〇メートル、激流渦巻くゴルジュを無事下ったそうです。

終りに十二日間付合ってくれたガイドと運転手のことも書かねば片手落ちになるでしょう。ガイドは熊さん、少数民族「佤（ワ）族」の出身で三二才、日本語は相当できます。比較的よく訓練されており大変気をつけてもらいました。

雲南省における5000m以上の雪山

（玉龍雪山の登山許可は雲南省体育委でとれるが、他の山は全て北京の中国登山協会の許可が必要） 20-5-1990

山名	標高(m)	○印：登頂 ×印：未登頂	アプローチ	住民	注記
1 梅里雪山 メイリー・シュエシヤン (Ka Karupo 山塊)	6,740	×	道路あり 但し、約30km 徒歩	チベット人	1) 梅里、太子雪山は一つの山脈にある 2) 梅里雪山の試登記録： ○1986年10月 日本ヒマラヤ協会（偵察） ○1987年8月 新井山岳会（日本） ○1988年5月 アメリカ隊 ○1989年6月 中日（京大）合同隊（偵察） ○1989年10月 "（登頂隊）
2 太子雪山 タイシ・シュエシヤン	6,509	×	未試登	道路なし	"
3 玉龍雪山 ユーロン・シュエシヤン (Jade Dragon Mountain)	5,596	○	1987年5月 アメリカ隊登頂	道路あり アクセス便利	ナシ族と チベット人 試登記録： ○1983年 NZ隊 ○1984年4月 日本ヒマラヤ協会隊 ○1984年8月 日本京都隊 ○1985年4月、10月（2回）アメリカ隊 ○1986年4月 アメリカ隊
4 甲午雪山 ジアオウ・シュエシヤン	5,404	×	未試登	道路なし	チベット人 位置関係未確認
5 吟巴雪山 ハーバー・シュエシヤン	5,386	×	"	"	チベット人とナシ族
6 白芒雪山 パイマ・シュエシヤン	5,428	×	興味の対象の外	道路から至近の ところにある	チベット人 容易に登れる

運転手は王さん、納西族の麗江出身で三五才、少々短期で、紅衛兵に参加した経験もあるが今は共産党員ではありません。家族は麗江に住んでいます。大理からラサまでトラック輸送に従事したこともあり運転の腕は確かでした。ご両人とも容貌は広東人よりは日本人に似ています。二人とも素朴で陽気で大酒呑み、抜け目なさと駆け引きが鼻につく香港人と比べれば、大変愉快な道連れでした。

帰路は大理で折よく年一回の盛大な「三月祭」を見物し、観光地で名高い石林にもついでに行きました。玉龍雪山のふところに入り、感動的

な山との対面もかない、また納西族、白族の少数民族の生活ぶりにふれることができ、興味深い体験、見聞を十分楽しみました。アンデス遠征から約三〇年ぶりに僅かな日数でしたが自前の満足のゆく、あえて英語で言うところの「Journey」ができたことは幸いでした。

前述のように雪南省の中で現在外国人に対して麗江までは解放されていますが、その先金沙江を越えたチベット人の住む中旬、徳欽（阿敦子）方面は解禁されておらず、入山には北京中央の許可が必要です。就中、雲南の最高峰で注目されている梅里雪山は申請が数多く出されて

おり、許可取得にはビジネスのような工作が裏で行われていると聞きました。いずれにしても今回はほんのとは口をのぞいただけです。雲南は奥深いところですが、単に山だけでなく隔絶された地域には禁断の実に惹き付けられる魅力を感じます。とりわけ梅里雪山、太子雪山の山脈（カカルポ山塊）の西側から北へかけてのサウウィン河流域、更にその西北のビルマとの境に接する東チベットの知られざる地方は解放が待たれます。来年も休みがとれば、麗江より奥に入る機会を、香港針葉樹会の仲間にも声をかけようと考えています。

ひとのいない山 (No Hill) 望月 達夫

「ひとのいない山」という題名で、既に二回駄文を綴ったが、私の場合は人のいない山へ行くことが多いので、材料にこと欠くことはないし、近頃はますます低山ばかり登るようになったもの、これもまた人のいない山なので、前の続きを書いてみよう。

今回は男鹿山塊の山を挙げてみた。この山塊は高原山と那須の山々の中間に位置して、東京からわりあい近いのだが、森林に蔽われた地味な山域なので、昔からこの辺では一番登山者が

少ない。最高峰の大佐飛山（一九〇八メートル）をはじめ、日留賀岳（一八四九メートル）、鹿又岳（一八一七メートル）、男鹿岳（一七七七メートル）などが高い方で、二〇〇〇メートルを超える山はない。

日留賀岳を除いては登山道といえるものはないが、大佐飛山へは明大ワンゲル部が時々行くらしく赤布がついていると聞いている。他の二山は塩那道路（これは開削後未管理のまま放置されて悪名高かったが、近年改修に着手された

と聞いているので、遠からず車道として使用できる筈）から近いので、登る人がなくはない。日留賀岳は古来信仰の山として登山道もあり、昭和三十年ごろのガイドブックに載ったこともあるが、一時、道の手入れがされなかったので登る人がなくなった。数年前から、また道の手入れも時々行われるので、登山者も少しずつ増えていく。

○日留賀岳——五万図（「那須」「塩原」）

私が登ったのは昭和六十年五月十九日だが、行程を考えると朝発ちの日帰りでは少々きついと考え、山麓に一泊した。

十八日午後東京を発って鈍行を乗り継ぎ西那須野下車。一行は若い仲間のY、O、Nにマイカーで来たM。中塩原から手代原^{てしろつばら}まで車で入って、K氏宅の近くでツェルトで泊ろうとしたら、同氏から空室があるから泊れといわれ、その厚意を有難くうけることにした。日留賀岳のことをきくと、昭和三十年代の後年、笹藪がひどく登山道も荒廃したが、近年道の刈払いをしたこと、御岳山とも言い祭神は大山祇神であること、などが判った。

十九日は晴天にあげたが、薄雲がやや多く夕方から曇ってきた。天気は西から崩れてくるという予報なので四時四十五分には出発。五万図の破線路に従って植林中を二十分ばかり登ると、昭和三十七年十月一日建立の日留賀岳神社の石碑が目についた。

その先から尾根をジグザクに登り高度を上げた。ヤマツツジが咲き新緑が目にしみるようになった。比津羅^{ひつら}山の東側をまわるところは松の植林で、チゴユリが咲きユキザサやモミジガサ（秋田でいうシドケ）も沢山目についた。比津羅山をまき終る辺りは笹が一面で、地形も広々としているから、この笹藪がひどくては、一時登拝が思うにまかせなかったことも、よくうなずけた。

その先でははっきりした尾根の登りとなるが、フクベノソネという名があるそうだ。

・一五一四のすぐ手前のコブに出ると丁度休むのによい所なので一服した。その辺から行く手に日留賀岳の山頂とすぐ手前の峰が見える。一五一四を過ぎると古い木の鳥居があり、やや下りとなってギョウジャニンニクが生えている所があった。

鳥居から四十五分、かなり苦しい登りを続けると、右手の自然石に「一海霊神 明治十年二月十日 当国河内郡岡本村落合駒吉」とほつてある碑があった。その辺にはアズマシヤクナゲが真紅の花を開き、またシヨウジョウバカマの花も残っていた。

右手に大佐飛山がよく見え、黒木が多くなる。日蔭に僅かに残雪を見るようになり、やがて古い木の小祠の朽ちたのが現われると、樹林から解放されて日留賀岳の山頂についた。私にはほぼ五時間かかったが、若い人なら二十分位は短縮されよう。三角点標石は二等で上面の十印は消えていた。日留賀岳神社とほつた石祠の屋根だけが残って、セメント造りの巨きな土台に乗っていた。

昔の黒刷りの五万図には神社記号がちゃんと載っているが、現在のには消されている。昭和三十五年一月に藤島翁と高原山へ登ったとき、翁はしきりに日留賀岳へも登りたがっていたのを思い出し、その時から二十五年もたつて登れたことを翁の霊に報告したいような気分になった。

た。

山頂からの展望は特にすぐれていて、男鹿山塊の山はすべて手にとるようによく見えた。展望を好む^{むと}仁には、この山を推奨するにはばからぬ。

○小佐飛山（△一四二九）——五万図同前

^{おおさぎ}大蛇尾川と小蛇尾川とを分ける長大な尾根（ナカド尾根と呼ばれる）に位置するこの山へは、登る人が殆どないようだ。周りにより高い山があることと、特に目立った山容をしていないからであろう。

だが、私が若い友人Oとこの山に登って特に感銘を覚えた点は、一般に登山道がない山と言っても、この程度の標高の山なら、薄いながら踏跡とか、何かそれらしいものがあるのが普通だが、この山に限っては、そうしたものが全くないということである。

登ったのは平成元年十一月四日で、もう日の短くなった晩秋なので、帰途があまり遅くなるわけにはいかなかった。登り口は蛇尾川の奥の萩平で、そこ迄は黒磯からタクシーを使った。現在小蛇尾川の上流に揚水発電用のダムを造成中なので、車道が奥まで出来ており、それを少し歩いてから、ナカド尾根へ登るわけだが、車道からの登り口には道標もあってよくわかる。タクシーをおりて歩き出したのが七時四十五

分、ナカド尾根のまき道から右手へ杉の植林の
仕事道に入ったのが八時三十分。その分岐は標
高約七五〇メートルで「萩平」「小蛇川上流」と
書いた白い道標がある。仕事道は尾根筋へは行
かず右へまいて行くようなので、それを捨てて
径のない尾根上を登った。この辺から帰途のこ
とを考えて、点々と赤テープを付けていった。
二枚の五万図の合わさる辺りで、〇が鈍で小枝
やボサを切りながら急登を続けた。左手にガレ
が見えると、小蛇尾川奥のダム工事の現場がは
るかに見えてきた。

踏跡も何もない所を登るのだから、松の根元
の古いワイヤーを目にしたたり、白い何かの杭を
認めたりして、標高約一〇〇〇メートルについ
て一息入れたのが九時四十分。ドウダンやヤマ
モミジ、ウルシなどが紅葉していた。さらに十
五分位登ると樹林がきれて、低い笹原に出、日
光の女峰山や高原山、近くの弥太郎山などの眺
望に接することができた。一一一〇メートルの
峰に辿りついたのが十時十五分、テープを付け
ながら登ったとはいえ、かなり時間を要したも
のである。

尾根は僅かに下ってまた登りとなるが、急登
のうえに笹もボサも多く、前橋営林局の白いプ
レートに書かれた注意書を藪の中に見たのもそ
の辺だった。一二三〇メートルのややゆるやか
な尾根に十一時二十分に辿りつき、葉を落した

樹間から鹿又岳や大佐飛山、黒滝山などを眺め
ることができた。

その辺りから尾根上には短い笹、目通り直径
一メートルに余るブナやツガの巨木が点在する、
まことに素晴らしい景観となった。尾根も所に
よっては舟窪地形（二重山稜）も見られるよう
にひろがり、一四〇〇メートル級の山としては、
稀れに見る原始の姿をとどめていた。約一三〇
〇メートル付近だったろうか、尾根の真上にあ
たかも巨大な碑石を思わせる大岩が現われた。
これはよい目印になろう。

その先の山頂の一つ手前の峰への登りでは一
番深い笹藪に遭遇し、背丈をこす笹を漕ぐのに
大いに汗をかかされたが、距離が短いのでヤレ
ヤレと思った。ようやく手前の峰に達し、やや
長い頂稜を藪をわけながら僅かに下って最後の
登りにかかった。三百本も用意してきた赤テー
プも使い切ったころ、笹は短くなり、ゆっくり
登ってゆくと、ナラの原木かなにかで組まれた
小さな櫓が残り、その下に実に綺麗な御影石の
三等三角点標石のおかれた小佐飛山の山頂につ
いた。時刻は一時二十分で、五時間半余を要し
たが、近頃登った山でこれ程原始性の残ってい
る山もなかっただけに、私は心から嬉しく思っ
た。

帰途は赤テープのお蔭で迷うことなくずんず
ん下れ、ナカド尾根のまき道の分岐まで二時間

余、四時少し前に着くことができた。晩秋の日
の暮れは早いから、四時までには着きたいと思
っていたのが、うまくいった訳である。

ナカド尾根にも昔、伐採が入った筈で、その
頃には仕事道もあったと思うが、林床は笹が多
いせいで、そういう所は踏跡めいたものもとか
く消えがちになる。現状は踏跡すら皆無といっ
ても過言でない。

ケモノはクマ、カモシカなどがいると思うが
先述のダム工事は時々大音を発するから、大佐
飛山の方へ逃れているかも知れない。しかし私
たちは帰途に新しいカモシカの糞（所謂タメグ
ソ）を認めた。

小佐飛山の場合は、二万五千図（「日留賀岳」
「板室」・「関谷」）を用い、できれば高度計があっ
た方がいい。またナタメを入れたり、赤テープ
をつけることを切望する。

（一九九〇年五月）



老スキーヤーの近況報告(上)

久保 孝一郎

はじめに

加齢によって当会でスキーをやらなくなる人が多くなったのは残念、リフトやロープウェイの発達した今日ゲレンデへのアプローチが老人にも楽になったから、速度を自制して、他人に衝突されぬよう周囲に注意して滑っているぶんには、負傷骨折の心配はなく、こんな楽しいスポーツは他にはあるまい。

健康診断で労作性狭心症と宣言された私には、走ったり登ったりは最近とみにシンドクなくなったが、スキーで滑降していれば心臓の負担も軽い。それに老人の私には、練習に努めれば多少なりとも技術の向上が望める唯一のスポーツだけに、なおさらに楽しい。そして気の合った仲間と共にゲレンデを脱して、山野にスキーをすすめれば無常の悦びである。

以上の考えで私は冬から春にかけてゲレンデ・スキーと山スキーに精を出している。
以下今シーズンの記録を逐次しるす。

一、初滑り・野沢温泉・八九年一月二六日～二

九日

孫娘(小六)を連れて冬休みに入り早々に出かけるが、雪少くシュナイダー・スロープあた

りは滑れず、上ノ平に行くも、リフト混む。

二、恒例・JAC(日本山岳会)懇親スキー・

八方尾根・九〇年一月一三日～一五日

もう十年以上も毎年続いている右の会で私は常連。かつて故・中島孚氏が一度参加されたが、それ以外に一橋OBの参加者のないのは、針葉樹会スキー山行が絶えて久しくなることと共に淋しい限りである。

例年黒菱の中央大学小舎を使用させて貰ってきたが、今年は断られ、宿舎は第一ケルンの国民宿舎・八方池山荘に変更となった。ここは山に最も近いし、また集会委員の炊事負担が省けるのが良い。

一月一四日 晴だが強風で第二ケルンまで行った。ここで風にミトンを片方飛ばされてしまったが、スプアーの手袋にはめかえた。ここはゲレンデでなく、山だ。防風の紐をつけておくべきだったと反省させられる。

一月一五日 朝食後解散。リーゼンコースを下ってゲレンデに至近の第二共同温泉沐場に行き汗を流し、リフトでまた上って明治大学黒菱小舎に泊めてもらう。

一月一六日 朝食後リーゼンコースを下り、バス停に近い第一沐場で汗を流して帰京。

三、OMC(おいらく山岳会)北海道・富良野

と札幌・手稲山スキーツアー・一月三〇日～二

月三日

一月三〇日 JASで旭川空港に行く途中、快晴で日高の山なみがよく見えた。かつて望月達夫氏、故・大塚武氏らと登ったペデカリ岳山行を思い出す。

午後からスキー練習、さすが北の国だけあって雪質上々、夕方には寒気きびしく顔面や手先が冷えた。

一月三十一日～二月一日 終日練習に励む。私らのホテルは北ノ嶺スキー場下にあつて、ワールド・カップの選手らの宿泊所となる西武の高層ホテルは富良野スキー場にあり、途中のリフトで両スキー場を往復できるよう連絡されている。

二月二日 午後二時にゲレンデからひきあげて四時のバスで札幌に移動、夕食後、準備中の雪祭りの会場を見て廻る。

二月三日 札幌近郊の手稲山スキー場で滑る。湿雪が降り、富良野に劣る。三時にきりあげ、四時のバスで千歳空港に向い、帰京。

このツアーの参加者中、最高年は八四才、私もまだ一四年は滑れる勘定と意を強くした。また偶然に同室となった大江敏夫氏(早稲田、政経学部OB)と私の念願していた本場アルプスの春スキー計画に意気投合し、同地、スキーに登山と経験豊富な同氏に旅程立案を一任できたこ

とは今回ツアーの大収穫であった。

四、TSC(東京シュプール会)乳頭山・秋田

駒ヶ岳スキーツアー。三月一日～四日

TSCはOMC会員の山スキー同好者を核として設立され、一〇年近くなる。毎年シーズン前の秋に予定行動表を作り、翌年初夏に打上げ会を行う。

今回のツアー目的は当会の長老で、昨年逝去した故・軽部彌生一氏(私より暦一廻り年長で、北大スキー部OB、三月一日に出生したので父親が以上の命名をされた由で、珍しい名前である)が孫六温泉が好きだったため、その追悼行としたが、会員中に海外スキーに出かける者あり、今回は私と奥村一郎氏(当会員樋口洪氏と一橋同期で、サッカー部OB)だけの参加となつてしまった。たまたま故人とも三人が旧制・東京府立一中OBであったことは奇縁である。右が三月一日出発の由縁である。

八時上野発新幹線盛岡経由、雫石下車、それよりバス乳頭温泉郷終点。例年ならここからスキーをつけるのが、今年は暖冬で徒歩二〇分、正午頃宿につく。昼食後、明日の乳頭山登山に備え、とりつき尾根を一時間偵察に出かける。天気は偵察行には勿体ないほどの大快晴である。

三月二日 高曇り、宿を七時半に出る。昨日はシールをつけて登ったが、今日はスキーをリユックにつけて、つば足で登る。登高の能率化と帰途の足跡明示のためである。赤布は所々散

見したが(前二回とも皆無)、完全にはつながってない。

ゆっくり登り、三時間弱で田代平山荘に到着。付近は雪原で、リングワンデルングしそうな地形の故か、小舎の手前には三本の赤布の竹が間隔をおいて立ててあった。この頃あいにくと頂上にガスがかかり、また少人数の理由で、一休みしてからもどることにした。私の三回めの挑戦成らず、昨日の快晴がうらめしく、この次は多くの友を誘って来ようと心に誓う。

正午頃温泉につき、一沐、食事後、今宵の宿・田沢湖高原温泉・国民宿舎・駒草荘をめざしバス停に急ぐ。この宿の、田沢湖を見下ろし、秋田駒を見上げることのできる大露天風呂は素晴らしい。この風呂に入るだけでも来る値打ちはある。

三月三日 朝宿のフロントに秋田駒八合目小舎(無雪期のバス終点)まで登る旨を告げたら、雪上車に乗せてくれると言われ、雪上車出発地点まで宿の車で送ってもらう。毎年三月の第一日曜に町主催の八合目スキー登降競技会があって、今日はその前日荷上げのため、町の雪上車が出動、それに私らは便乗させてもらった次第である。

登りは楽ししたが、降りには暖冬によるアイスバインで快適ではなかった。下山後ゲレンデでスキー練習、奥村氏は三時のバスで帰京した。

三月四日 朝ものすごい濃霧だが、使い残し

のリフト回数券があるので、これを消化した後、バスをつかい下の県営スキー場へとはしごをする。今日は日曜だが、暖冬のためスキー客の出動少なく、リフト回数券を難なく消化し、二時のバスで帰京。

五、春休みファミリー・スキー合宿。八方尾根・

三月二六日～二九日

三月二六日 春休みに入った孫二人をつれて細野の定宿に向う。宿舎到着後、黒菱付近で初日の軽い練習をする。昨年同様、暖冬のため下半分は滑降不能で、帰途はリフトで咲花(サツカ)に下り無料スキーバス利用か、ゴンドラで細野へ下るほかに、従って午後の練習は早めに切り上げねばならない。

三月二七日 快晴、九時前に前記のバスで咲花に行き、リフトを乗りつぎ、第一ケルンにつく。白馬三山、五竜、鹿島槍と眺望よく、孫ども(小六と小四)に感激して見てもらいたい景觀だが、彼らは足もとのスキーに気をとられている。アルペンリフトわきのコブの多い斜面も何とか無事に通過し、黒菱前後付近で自由練習とする。孫たちにはスキー学校に入るようすすめるが、自由練習の方が勝手にできて良いらしい。早く上達して、丸山あたりまで行けるようになるのと面白いのだが、まだ二年はかかるだろう。

黒菱のコブの多い斜面は今の私の技術では苦が手だが、左側の電柱のたっている尾根が、コ

ブがなくて、よいことを新発見した。このようなルート発見もスキーの面白味の一つである。

三月二十八日 晴時々曇り。今日も自由練習。顔が日焼けして、女の子の孫はボヤいてる。

三月二十九日 雨。三日続きの天気も崩れ、思い切って朝食後すぐ帰る。宿の主人が駅まで車で送ってくれる。

六、欧州アルプス・春スキーツアー、四月六日
〜二二日

八八年八月に、JACの土曜会と三水会で顔なじみの坂倉登喜子女史に案内されて、初めて欧州アルプスに接した。その時特にベルナー・オーバーランド地方グリンデルワルトの奥のフイルスト行き四段リフトと、それから眺めた牧草地の斜面や、はたまた登山電車のクライネ・シャイデック駅からヴェンゲン駅までのハイキング・コースから受けた印象で、ここに雪が積もれば素晴らしいスキーコースになるだろう、体の動くうちに再来せねばならぬと決心した。

この思いが今シーズン到来とともにつり、旅行社の海外スキーツアーのパンフレットを取り寄せたり、当会、JAC、TSCの同行できそうな人をマークしたが好結果なく、幸い以前記三項の通りOMCの大江氏という好伴侶を得られた。氏は稲門山岳部の出身ではないが、独力で山にスキーに精進され、マッターホーン、モンブラン、マッキンレーに挑み、キリマンジャロは登り、その他ソ連、中近東、パタゴニヤ

地方も歩き、海外旅行歴三〇回になるそうだ。

私は、出発は税金申告期限三月一五日以後と、期間約半月という大枠の条件以外、委細一切おまかせして立案してもらったところ、四月六日発、モスクワ経由チューリッヒ一泊、スイス国鉄パスでグリンデルワルトへ、二泊、ヴェンゲン二泊、ツェルマツト五泊、シャモニー四泊、チューリッヒ一泊後、モスクワ経由四月二二日帰国という旅程ができ、旅行社には三月二六日費用二九二(以下単位千円。内航空運賃一六〇、スイス国鉄一等パス三二、ホテル代一二泊一泊夕食付一〇〇)を払込んだ。

四月六日 晴、成田をソ連航空アエロフロート機で正午出発、途中、上越国境の雪山、新潟平野、日本海、佐渡ヶ島、大陸の雪山、凍原地帯が眺められた。モスクワでチューリッヒ行きに乗りつぐのが予定時刻では二時間待ちだが、空港内に掲示時計なく、O氏の電子手帳の地球時計で現地時間に合わせたところ(日本との時差六時間)、結果的にはそれが一時間遅れで、あやうく乗り遅れるところだった。モスクワよりチューリッヒまで約三時間、途中でようやく日没となり、現地時間二〇・五五に到着、この日照時間の永いのが時差ボケの原因となるのであろう。空港地下駅から国鉄で中央駅、さらにタクシーでグロッケンホーフ・ホテルへと行き、ベッドインしたのは二三時(日本時間七日の五時)頃、疲れました。

四月七日 曇、出発前にフロントに東京で予約してなかった、一五日夜のチューリッヒの宿

に、O氏推奨のキントル・ホテルの予約を依頼する。徒歩で中央駅に向い、約一五分で到着、ローザンヌ方面行きの列車に乗るのに、二度も乗り間違え、三度めの正直でやっと正しい列車に乗ることができた。その間違いの原因は、ホテルでくれた列車時刻表に番線の出ていないこと、駅員との対話に会話力の不足のこと、各車輻に行先表示のプレートがない(二輻おきにあった)こと等で、総じて慣れていないため、以後要領が分かった。

途中ベルンでインターラーケン行きに乗りかえ、インターラーケン・オスト駅で下車、手前のツーン湖畔の、桜や桃の赤とレンギョウの黄の開花と農家とを合せた風景はまさに泰西の名画を見る思い、日本とスイスとこの春は二度の花見ができた。それより登山鉄道にまた乗りかえ、グリンデルワルトには正午すぎ到着した。雨天で雪の消えた街の中を二晩の宿となるシュピネ・ゲスト・ハウスに赴いた。

この日は駅前にある日本語案内所(日本人が三人詰めていた)でスキー場情報を仕入れてから、時差ボケで疲労のとれぬ体をベットに横たえ、夜は近所のレストランでスイス名物料理のホンデュウを食べたが、胃の調子の悪くなった私には格別うまいとは感ぜられなかった。

(次号に続く)

小谷部全助 森川真二郎

両畏兄の追想

宮城 恭一

「不精せずにもっと遠くの雪をとって来い」と言われ、吹雪の吹き荒れるテントを出た。息が出来ない程だ。

時は昭和十二年三月中旬、場所は遠見尾根の稜線上。厳冬の北岳バットレスの登攀に成功し、その後直ちに目指した鹿島槍荒沢（カクネ里）の北壁の積雪期登攀の、両氏のサポートとして入山したときのことである。私は予科一年の三月、すぐ二年生になるところ。一緒にサポートしたのは、小林重吉さんと鷺崎雄四郎（故人）である。

遠見尾根は大糸線神城駅で下車して直ちに山道に入る。長いアプローチはない。深い雪の急登が続くので直ちに輪カンを着ける。二週間分の装備であるからかなりの荷を背負った。石油の一斗罐もある。小屋は利用しないという計画で、最近山岳部で購入した自慢のウインパーテントを張った。テントを張る前に、雪上に出ている樹の小

枝を折り取って来て敷きつめる。その上にテントを張って、木綿の内張りをつける。快適な空間が出来る。夕食後お茶を飲むのに水の補給が必要となり、私がテントの出口の近くの雪を鍋に山盛りにしてラジュウスにかけた。ところが出来た水は煙草の吸いがら一杯浮いていて、茶色の湯ができた。それで冒頭の言葉になったのである。

そのとき小谷部、森川両先輩の厳しいがやさしさのこもったまなざしは、今でも目に焼きついていて。両氏はその後、前穂高の東面、奥又白の壁の登攀を果たされたが、凍傷を負われ、両足の指を無くされた。このことは針葉樹第十号に詳しく記されている。両先輩は学生時代の青春をひたむきに、当時の大学山岳部のあり方に向って邁進したと言って過言ではあるまい。

そして両氏は奇しくも終戦の年、昭和二

十年の十二月十三日の同日に、同じ胸の病いで逝去されている。その当時私は学徒動員で近歩四連隊に所属し、スマトラで終戦を迎え、知るすべもなかった。どうしてこ

うも同時に亡くなられたのか。両先輩の偉業は、日本山岳会も日本の山岳史に留められ、高い評価を与えられている。

しかし一方そのいき方についての批判もあり、今の一橋山岳部の抱える問題も同一であろう。私も色々考えているがなかなか結論が出せない。

しかし、親しく接し、数々の山行を共にして、色々と教導してくれた両先輩は、私の胸に今でも偉大な存在であることは間違いない。

余談になるが予科一年の夏の合宿は穂高の涸沢で行われ、その時徳本峠を超えて上高地に入った。その時私の登る姿を見て「ゴムちゃん」という、あまりかんばしくない仇名をつけてくれたのは小谷部さんである。小谷部先輩は「助さん」と呼ばれていたが、森川先輩には仇名はなかったようだ。

どうしてにも分かりませんが

柿原 謙一

昨年の秋頃に、上京して山友に会ったとき、

学生山岳部がどうも異常な問題をかかえてきた、と聞かされて驚いた。山岳部存廃の件は、OBが指示することではなく、それは大学と学生との話し合いによるべきことだが、それにしてもと嘆息した。嘆息したものの、混沌としていて、どうにもわけが分かりません。他の大学での状況は？

頭にうかんだのは、事故多発で常磐教授が部長を引退された時のこと。ところがこのたびは、部長教授が廃部ないし部員の登山禁足を主唱されたという。どうも深刻さが深すぎるな、と感じた。'90になり会報第74号が到来し、西牟田伸一さんのレポートを読む。ここではじめて全貌を知ることができたが、どうにもすっきりせず、事態は混沌としているのだ、と納得するほかなかった。

四月に入ると、会報幹事から会報第75号原稿募集のご案内が届き、「一橋山岳部の窮状について、是非とも諸先輩方の貴重なご意見、ご助言を戴きたく……」とある。西牟田レポートを読んでも、すっきりしない私には、貴重な意見なり助言なり、書く資格はない。役立たぬと思いつつも、針葉樹会の本家一橋山岳部に有終の美

あれと念じつつ、私の心境を述べるほかない。

(1) 混沌状態は、OBと現役との心境なり価値判断が、乖離したことから生まれたように思う。心がつながらない。伝統は重んじてこそ価値を生むが、重んじなければ路傍の石と同じで、蹴つとばせば、どこかに飛んでしまっただろう。

(2) 登山には大別して二つの仕方があった。

一つは山旅であり、芭蕉が平泉から山越えで、出羽の立石寺に至り、「閑さや岩にしみ入る蟬の声」(奥の細道)と吟じた心境にもつながる態度。二つは近代アルピニズムであり、槇先輩がスイスから、わが国に導入した登山態度。一橋山岳部は、当初は主として一の仕方であったが、一九三六年頃から二の仕方が主流となってきた。

このような伝統が、いまの山岳部ではどうなっているのだろう。部の登山態度は、混沌としているようで、私には分かりせんが、思うに登山趣味と別の諸趣味とが、混合している学生生活によるのだろうか。一や二の登山はひたむきで、別の趣味をかねて登らない。だから海辺の岩やビルでもな

ると、それは第三の登山態度と判断せざるをえない。混合混在してどこが悪いという主張もなりたつだろう。私は不賛成だが、さてそれではどうするか？

(a) 針葉樹会と一橋山岳部は分離独立する。これは、私としては感情的に、つらいことになるが、山岳部が第三の登山態度をとる限り、世の中は変わったのだ、とあきらめるほかない。

(b) 一橋山岳部の続行か廃部か、という問題は、私にとっては、本家のことであり、大学と学生がきめればよい。個人の自由の尊重と、話しあいによる妥協の両立という、生活態度形成の試練をくぐらねばならないだろうが。

(c) 残る問題がある。混沌的生活態度ではなしに、山に登ることが好きだから登りたい、という学生と、とくに若手OBとの関係を、どうすべきかという問題がある。会社勤務の若手OBは、疲れきって家に帰る。夜も遅い。この人たちに、アルピニズムの指導をするだけの余力ありとするのは酷だろう。個人的交際の結果で生まれる友情登山があるだけ。でもそれが実現できれば、若い学生さんは救われるし、OBとしても大きな苦にはなるまい。アルピニズムだけが登山ではないだろう。

香港針葉樹会

現在、香港には五名の針葉樹会員（中村保・

昭和三三年卒、中島寛・昭和三六年卒、長沢道彦・昭和三九年卒、神野隆・昭和五四年卒、引地真・昭和五五年卒）が在住しています。海外の都市としては最多人数の会員をかかえるばかりでなく、八九年の名簿を見るかぎりでは、日本国内の大阪や名古屋在住者数よりも多く、東京圏以外では最も多くの会員のいる都市となります。いわば香港は針葉樹会第二の拠点と言えるわけです。それにふさわしく、香港在住の会員は、地の利を活かして活発な活動を行っています。

その当地に、旧正月気分の冷めやらぬ一月三十一日、石井会長がお越しになりました。早速在住会員に召集がかけられ、誰もが海外駐在の多忙を極める中、どうしても都合のつかない長沢道彦氏を除く四名が、翌二月一日夜、尖沙咀^{チムシャイ}の日本料理屋に集まり石井会長を囲みました。ネパールのランタン谷トレッキングから戻ったばかり

引地 真

の中島寛氏から美しいヒマラヤの写真が披露され、トレッキングの話に花がさきました。また、中村保氏は前年クリスマス休暇時のスイス、オーストリアのアルプスの写真を披露されるとともに、今年四月に予定している中国雲南の揚子江源流行の計画を明らかにしてくれました。

石井会長も、山への思いが日に日に強くなり、実はこの出張は一日も早く帰って、今度の週末も奥多摩に出かけたい、と話しておられたのが印象的でした。

さらに、ちょうど会報七四号が各会員の手元に届いたばかりのときでもあり、話題はどうしても山岳部の問題になりました。石井会長から東京の様子をうかがい、在京の幹事、評議員、会員の皆様のご苦勞を思いやらざるを得ませんでした。学生に一番近い位置にいられる石部長の意見は、充分に尊重されなければならないと思われまふ。そのご苦勞は察するに余りありま

す。山登りには事故のリスクは常についてまわります。しかし、学生の事故はもうこれ以上は御免こうむりたいものです。ただ、現役学生がたとえ一人でもやる気のあるものがいれば、OBとしてサポートしてやるべきではないでしょうか。もし、そのような学生がいなくなれば誰が何と言おうとも、自動的に部は存在しなくなります。このような話になると、議論は尽きないのですが、行きつくところはOB自体の登山しないしは山への考え方になってしまいました。もちろん世代による意識や価値観の違いはあっても、OBが山への情熱を持ち続け魅力的な登山をしているならば、状況は変わってくるのではないかと、という形で結局われわれ自身、わが身を振り返らざるを得なくなりました。香港にいるため直接学生と会って話し合える機会がないのが残念ですが、いずれにせよ、今こそOBと現役学生の交わりを多くするため、若手OBの一層の活躍を期待したいと思えます。その後場所を移してさらに話を深めようとして、二軒目の店を決めてから二手に別れて出たのですが、その店がすでに店仕舞いして、二パーティーは香港の百万ドルのネオンのなか、ついに会おうことなく、それぞれ勝手な場所まで酒を飲み続けたのでした。

一橋山岳部の存続問題に

ついでこの報告及びお願い

代表幹事 西牟田 伸一

頭書の問題については会報の前号にて報告し、会員諸兄にご心配をかけておりますが、これまでの状況について以下ご報告致します。

先ず、本年一月十八日本件に関する臨時評議員会を開きました。会の内容については別添資料①の議事録をご参照願いたいのですが、全会一致で一橋山岳部に対する会としての提案を取りまとめるまでには到りませんでした。その一週間後に開かれた新年会では簡単な状況報告にとどめ、会としての提案は先送りになっておりました。

三月下旬には事務局でこれ迄の議論をある程度集約し、五つの提言案の形にして全評議員のアンケートをとる方法で多数決による会の提案を作成致しました。

四月十二日付、石井会長名で一橋山岳部に対して出されたのが別添資料②であります。

この提案に対して、いまだに一橋山岳部からは明確な回答は届いていませんが、現在のところ、学生と石部長との間に存続の方法について

意見の食い違う点もあり、話し合いが続けられているとの事です。

その後の学生の活動状況を簡単に報告しておきます。たった四名の陣容ですが、二月の中旬には八海山、二月の下旬には奥志賀でのスキー合宿、ゴールデンウィークには越後三山とそれぞれ石部長の許可のもとで山行を続けております。

最後に会の代表幹事として皆様にお願ひがあります。

今回の針葉樹会としての提案の中に会の学生に対する援助を充実すると言う項目がありますが、言うは易く行うは難し、であります。そこで会員諸兄の広範な援助が必要になります。世の趨勢からして弱体化していかざるを得ない一橋山岳部をなんとか存続させる為には、昔のような金銭面の援助あるいは少数の担当幹事の狭い経験だけではどうにもなりません。やはり学生とOBとの触れ合いを充実する必要があります。そこで提案なのですが、二カ月に一度位のペースで会合を持ちたいと思います。奇数月の第一土曜日、午後二時に国立の部室に集合し、三時間ランニングなどのトレーニングを行い、そのあと学生とOBとの交歓会を行う事にします。勿論午後五時頃からの交歓会にだけ出席されるのも結構です。東京の西部にお住まいのOBが主体になると思いますが、こうした会合

がある事を遠方にお住まいのOBも頭に入れておいて戴き、何かの時にフラックとお寄りになるのも一興かと思ひます。

従って第一回を七月七日、第二回を九月一日、第三回は十一月三日(月見の宴)と考えております。老若男女を問わず、出来るだけ多数のご参加を期待致します。

☆ ☆ ☆

資料①

針葉樹会臨時評議員会議事録

90・1・18 於 丸の内養和クラブ

出席者(敬称略)

小林評議員会議長、岩崎利一、久保孝一郎、樋口洪、笠原広信、上原一夫、倉知敬、岡部寛史、石井会長、石原副会長、西牟田代表幹事、中西総務幹事、近藤会報幹事、加藤学生幹事、斉藤学生幹事、山内(学生)以上16名

議題 「一橋山岳部の現状と今後について」

○石井会長挨拶 略
○西牟田代表幹事

会の趣旨及び取り進め方説明
現在までの経過報告
石部長の主張の要旨

内容一、本日お集まり願った目的は、昨年夏以来石部長から起こされている一橋山岳部廃部論に對して針葉樹会としての対応を議論して戴く為です。会としての結論が出るのかどうかハッキリしませんし、例え皆の意見が一致したとしても、それを一橋山岳部の今後にどう活かして行くかも分かりません。しかし会の今後を左右する重大事である事は確かですから、出来る限り、幅広い御意見を聞かせて戴ければ幸いです。

二、経過報告

石部長の主張の要旨は本席上でお配りする会報に掲載してある通りですが、石部長が述べられていない事で推測すれば

(1) 石部長は既に20年以上も実質的な部長の地位にあり、その間に6名の部員を失っている。もう、これ以上若い御息を失った遺族の顔を見るのは忍びない。

(2) 一昨年夏の細野君の事故直後にも重大な警告と受け取れる発言があった。

三、尚、有力OBの御意見として「OBの方から石部長の説得にあたるべき」「何も急いで結論を出すべきではない」という発言があった。

○山内(学生) 学生側の経過報告、現在の各自の状況と考え方

内容一、最近になって、内藤君を除く全員が退部届けを書いた。これは現在の状況が継続する限り、どんな山行も許されないからであり、自分達の登攀意欲を満たす為にはやむを得ない緊急避難的選択である。

大学四年間は我々にとって貴重であり、この半年間を何の見通しもないままに過ごした事は残念である。この為の退部届けである事を理解して欲しい。

また、一年生の二人は入部直後に上級生の事故に巻き込まれ責任はない。彼等が気の毒である。

二、現部員六名(四年 井上、三年 内藤、山内 二年 坪井、一年 天羽、古田)のうち、四月以降も山に登る意志のある者は四名であるが、古田は社会人山岳会に入っており、坪井と天羽はどうするか迷っている。山に何を求めるかは各自まちまちではあるが、例え山岳部が廃部になっても、今の仲間は崩さずに時々集まって、山行計画を話し合い、登り続けたいと思っている。

○評議員の御意見(主要なもののみ)

*小林 廃部ではなく一二年間の休部ではどうか。その間に再建策を考えれば良い。しかし、その間現役部員をどうするかが問題。漠然とした議論ではなく、その一点に絞って議論を進めるべきである。

*岩崎 山岳部を退部しなければ山登りができない。そうまでして山に登りたい、と言う現役がいる以上はなんとか続けさせてやりたい。伝統を受け継ぎ、継続する方法を考えるべき。近藤、柿原両先輩に話したら、とても残念がっていた。廃部は針葉樹会の存在意義までも脅かす。安全を確保する方法を考えて、大学当

局を説得してなんとか存続させたい。そうしなければ、学生を野放しにするリスクが逆に発生する事になる。

*久保 根本氏は石部長に引き続きお願いできないかと言っておられる。(代理出席)同好会全盛等、時代の流れのなか、廃部も止むなしか。

*樋口 この数年新入部員の減少の話を聞いて、自然消滅を危惧してきた。OBとしては耐えられない思いである。一二年間の休部期間を置いて良いのではないか。チャンスがあれば復活できるかも知れない。

それが結果として、アクラメのための期間となるかも知れないが。

*石原 一昨年の細野君の事故直後に石部長は盛んに廃部を言っていた。

年配OBを納得させるためには、「部員がいなくなった。」しかないが、現役がいる以上は石部長に面倒を見てもらいたい。

しかし、安全な登山だけでは時流に乗らないだろうし、今の学生の現状を聞くと、「山岳部も終わったな」と言う感じがする。

人命に関わる事といわれれば返す言葉がない。今又エ的な意志決定をして将来事故が起きたときの事が心配である。石部長の意志を変えさせるのにはいかなる理屈も成り立たない。

*笠原 学生がいる限りは部長、OB会は面倒をみるべきだ。(休部をしても現在いる現役の面倒はみるべきである)

*倉知 今日の会議では、「石部長の説得を針葉樹会として全面的にサポートする」と言う決議を

資料②

一橋山岳部 石部長及び学生諸君へ

平成2年4月12日

〔一橋山岳部の今後についての提案〕

採択すべきである。何故安易に退部届けなど出すのか真意が分からない。ただちに撤回すべきである。半年位の休部は止むを得ないが、必ず山岳部は続けるべきだ。過去の事例を考へれば出来る筈である。その際、実力の範囲内で行動する必要がある。石部長が退任されるのなら誰でもいい、頼めば良い。また、この一年間位は計画をOBが建ててやり、しっかりフォローすれば安全は確保できる。とにかく必ず山岳部は存続するべきだ。

*石井 石部長は部は廃止すべきだと言っているのであって、部長をやめたいと言っているのではない。安全な部をどうやって存続させていくかが問題である。

*上原 急な話で驚いている。山岳部の活動理念の根底には事故を起こさない、即ち技術を磨くと言う事があるはず。これをもう一度見直す必要がある。最近の多発する事故にはどうしても理解出来ないものがある。

*岡部 OB会からの重圧など、今の学生の気持ちも理解出来る。OB会としても過去の自分の体験からくるノスタルジーだけではなく、やるべき事がないかを考える必要がある。

*石原 学生には是非登らせてやりたい。石部長との間に冷却期間をおいてはどうか。新年会では結論を出せない。

*石井 石部長以外の部長はあり得ない。

*石原 総会までには結論を出さなければならぬ。

昨年夏の遭難のあと、石部長より提出された一橋

山岳部廃部方針は、我々針葉樹会に強い衝撃を与えました。以後様々な機会をとらえ、会員間もしくは学生を交えて議論を続けて参りましたが、なかなか会としての意見統一とはまいりません。

そこで、本年度の新学期を迎えるにあたり、左記の通り暫定的な提案をまとめました。本提案は多くの会員の意見を集約し、会長としての私の責任においてまとめられたものです。現会員の過半数の支持を受けられるものと思われまます。

願わくば石部長及び学生諸君が、本提案を少なくとも大筋においては受け入れてくれる事を希望するものです。

針葉樹会々長 石井左右平

記

現在の大学山岳部活動の低迷は、独り一橋山岳部のみに起こっている現象ではない。石部長の言われる、時代の変化は誰の眼にも明らかである。また自分自身の力を認識する事なく、危険な山岳活動に取

り組んで来たここ数年の一橋山岳部の活動は、正に反省しなければならぬ。

しかしながら、六十余年にわたる我部の歴史を、今ここで閉じるのは出来れば避けたい。今のメンバーでも何らかの山岳活動を続けて行きたいとする学生が四人いる以上、部の再興を試みる期間を、せめてあと一年間待てないものだろうか。

具体的には以下の通りの態勢で、部活動を継続する事を考えて欲しい。

1 一橋山岳部としての組織、体制はこれまで通りとし、石部長には引き続きお願いする。

2 「山岳部だからこれをやらなければいけない」と言うような考えは全く捨て去り、何よりも基礎技術の習得と体力養成に重点を置く。

3 針葉樹会の学生担当幹事を充実したものにすることで、これと定期的な打ち合わせを持つ。まず、年間計画を立て、これに沿って年間の各山行を個別に検討する。山行後には必ず反省会を開き、詳細な報告書を発行する。

4 新入部員の入部は、現状を充分認識した者だけに認めるものとする。

5 各部員が絶対に山で事故を起こさない事を最重点にした活動をするが、不測の事故を完全に避ける事は出来ない事と、事故の責任を大学には問えないことを認識し、その旨を保護者(両親等)に理解してもらい、了解の意を書面で表明(部長宛の念書等の差し入れ)してもらおう事にする。

以上

一月のガンジャ・ラ越え(上) 中島 寛

ランタン谷からへランブーへの山旅

はじめに

旧正月の休日をはさんで、十日程の休暇がとれることになった。さて、どこに出かけようか、と思索しはじめた時、まっ先に浮かんだのがランタン谷のトレッキングだった。

香港の地の利を生かすとすれば、台湾の玉山やマレーシアのキナバル山も有力な候補になりうる。しかし、この辺ならいつでも行けそうだし、都合のつく同行者がなかなか見つからない。台湾の場合には手続きが厄介なこともわかって、日がたつにつれ、ランタン谷をトレッキングしてみたいという想いがふくらんでいった。

ランタン・ヒマールは、カトマンズの北方数十キロの近きにあるが、ネパール・ヒマラヤに残された数少ない未踏峰の宝庫であり、しかも、ランタン谷は世界でもっとも美しい谷のひとつとして知られている。

ネパールが鎖国を解いて、外国人登山家に門戸を開いたのが一九四九年である。この年、入国を許されたのは、アメリカの学術調査隊の他、イギリス隊、スイス隊であったが、イギリス隊のH・W・テイルマンが、まっ先に足を踏み入

れたのがランタン谷であった。テイルマンは、翌一九五〇年にも、マルシャンディ河を遡り、アンナプルナ北面を探り、更に、チャールズ・ハウストンと一緒に、ナムチェバザールからクーンブ氷河に入り、南面からエベレストに接近している。この二年間の記録をまとめたのが、名著として名高い「ネパール・ヒマラヤ」である。その第四章は、次のような書き出しで始まっている。

「上部ランタンは美しい。開けた谷で草花が多く、両側には高峰が立っている。そこは放牧者の天国である。」(深田久彌訳)

ワクワクさせられる文章である。私自身、今から二十年以上も前に、辞書をひきひき本書を拾い読みして、ネパール・ヒマラヤのいろいろな側面に目を開かされた覚えがあるが、ランタンに関する部分の印象は鮮明に残っている。それ以来、ランタン谷は、いつかは訪れてみたい久恋の地であった。美しいU字谷、そこから真近に見える六〇〇〇〜七〇〇〇メートルの鋭峰の見事さもさることながら、私にとっては、山と人の織りなすランタン谷の山村の雰囲気、殊の他魅力的に感ぜられた。

そして、幸いにして、ガンジャ・ラの上立てたら数年後を頭におきながら、登山者の立場で、未踏峰の数々と対峙してみたいと思った。少しせいたくかも知れないが、登山の楽しみと旅の潤いを結び合わせられたら、というのがモチーフだった。

旧友の宮原巍氏(トランス・ヒマラヤン・トウアーズ社社長)に連絡をとり、打診してみると、「車をフルに使えば、一週間でも行けますよ」との返事を得た。本当かな、と半心半疑だったが、早速アレンジを依頼する。

宮原さんは、たまたま日本にいたが、すぐにカトマンズに電話を入れてくれ、現地事情を確認した上で、翌日には次のようなテレックスを送ってくれた。

- ① 軍の特別許可を取得し、車でダウンチェン またはバルクまで入れば、ガンジャ・ラを越えて、七日間でカトマンズに帰れる。
- ② THT(トランス・ヒマラヤン・トレッキング社)のパジエロを運転手つきで貸してくれる。
- ③ 二〜三人のシェルパを同行者としてアレンジする。

- ④ ガンジャ・ラ越えの二日間を除き、全員が原則として、現地食を通してほしい。
- ⑤ テントその他必要な装備。食糧は、中島が携行してほしい。

異存はない。これで、山行のアウトラインは

固まった。しかし、ここからが本当の問題だ。

カトマンズからダウンチェマまたはバルクまで車が入るとしても、このコースは、休息日を含めて二十日間が必要だと一般的に言われている。それを七日間で歩き通すことが、体力的に言って、それ程簡単に出来ることか。それに、幾ら以前に高所の経験があると言っても、まったくの順応期間なしに、すんなりと五二〇〇メートルのガンジャ・ラを越えることが出来るものか。どうか、もし天候でも悪くなったらどうするか、等々不安だらけだった。

結果としては天候に恵まれ、何とか無事に、予定通りの日程でカトマンズに帰り着くことが出来、大いに満足した。しかし、率直なところ、五十一歳の私にとってこの山行は、肉体的にも、精神的にも、限界ギリギリだった。毎日十時間以上の行動で、バテバテで、最後は何も食べる事が出来なくなってしまったし、時間に追われて、旅の潤いを味わうどころではなかった。

カトマンズで会った、旧友のビナヤ氏（AP / 毎日新聞特派員）は、「相変わらず日本人は何をやっても『新幹線』ですな」とあきれいていたが、悲しい性はなかなか直らない。時間の制約なしに、足の向くまま、気の向くまま、気の合った仲間と、のんびり山野を歩きまわる日は、いつ来ることか。

一月十九日 夕方のドラゴン・エア機で香港を発つ。出発は相変わらずのドタバタ劇で、食糧

を買い込むためにデパートに飛び込んだのは、前夜、閉店間際の九時四十分のことだった。仕事片づかず、着替えも車のなかだったし、出発ぎりぎりまで空港の公衆電話にかじりついている始末だった。

しかし、飛行機に乗って、一杯飲めば、もはや別世界だ。

ランタン谷を溯る

ダッカ経由カトマンズに着いたのは、一時間遅れの二十一時だった。香港のネオンの洪水に慣れている眼からすると、空から見ると灯りが少ないのに改めてびっくりしたが、清水建設が建設した空港の施設があまりにも立派なのに、援助の威力を痛感させられた。しかし、入国や通関の事務も、数年前に比べれば、格段によくなったし、空港からカトマンズ市街の道路も立派になった。アジアのどこでも体験することだが、

ネパールも、ゆっくりだが変化しているのは確かだ。計画の当初から関与し、操業開始まで十年以上かかったホテル・ヒマラヤも、オープンから二年半たった。客もふえ、サービスも板につき、一流ホテルとしての風格が出てきたように感ぜられたのもうれしかった。

一月二十日 晴・ガス多し。朝起きて胸いっぱい息を吸い込む。空気の味が違う。久し振りのことだ。

ネパールは土曜日が休日のため、官庁はどこ

も休みで、何も出来ない。凶らずも「カトマンズの休日」を楽しめることになった。THT（トランス・ヒマラヤン・トレッキング社）のアン・ギャルツェンと打ち合わせを済ませ、不足の装備・食料を買い揃えれば、後は何もすることがない。今日ばかりは、時間をもて余し、カメラを持って大好きなパタンの町をぶらつき、生命の洗濯をする。

一月二十一日 曇。いよいよ山に入る日が来た。トレッキング・パーミットを取得後、十一時三十分、二人のシエルパと一緒に、THTのパジエロでカトマンズを発つ。

同行のシエルパは、パサン・キパ・ラマ（二十五歳・ジェンベン出身）、カジ・シエルパ（二十四歳・オカルドワング出身）。二人ともソロ・クランプ地方の出だが、遠征隊参加の経験はない。この四、五年、専らトレッキングのガイドをつとめてきたようだ。宮原さんが自分で指示してくれただけに、さすがに、明るく、気の利く働き者で、英語も話す好青年達だった。

トリスリ・バザールを過ぎ、トリスリ川の左岸を高く巻きながら、車は次第に高度を上げていく。道は悪く、揺れが激しい。ベトラワチ、ラムチェと、山腹にへばりついた部落に近づくと、「耕して天に至る」階段状の畑がきれいだと、タルチョーがはためいていて、早くもチベット系種旅の集落に入ったことがわかる。

十六時、ダウンチェ着。高度一九五〇メートル

ル。チエックポストがあり、トレッキングの手続きを済ませる。さすがに寒い。早速、羽毛服を着込み、パサンたちが常宿にしている一軒の民家にもぐりこむ。夕食はネパール製インスタント・ラーメンに米飯とダル(豆スープ)。食後、ロキシ―(とうもろこしから造った焼酎)を暖め、コーヒーと砂糖を加えた、通称ムスヌン・カフェをまわし飲みして二十時、就寝。今日からは、毎日憧れていた、陽が沈めば眠り、陽が昇れば歩き出す生活が始まる。

一月二十二日 晴。昨夜は、蚤としらみに悩まされ、その上、二匹の犬の吠え声が四時まで止まず、ほとんどともに眠れなかった。しかし、夜が明けると、真っ青な空が広がり、朝陽に輝くランタン・リルンの鋭峰がいきなり眼のなかに飛び込んできて、眠気もふき飛ぶ。チャパティに紅茶の朝食を済ませ、八時にダウンチェイ。食糧、テント、ストーブ、燃料、ザイル等は二人のシェルパがもってくれたので、私は私物だけ背負えば済む。登山靴を含めても、せいぜい十五キロ強だ。道はすぐに自動車道を離れ、バルクからシャブルへの尾根道を辿る。シャクナゲと赤松の林が延々と続き、遙かにガネツシユIV峰が見える。心地よいトレッキング道だ。

シャブルは、二二三〇メートルの山腹の部落である。完全にチベット人集落であり、パサンもカジも、自分の家に帰ったようにくつろいでいる。十二時に着いて、真っ暗な、しかし居心

地のよい二階のかまどの側に居座る。ゆっくりと米飯とダルの昼食を済ませ、出発したのは二時だった。これがトレッキングのペースらしいと気がついたのは、大分後のことだった。

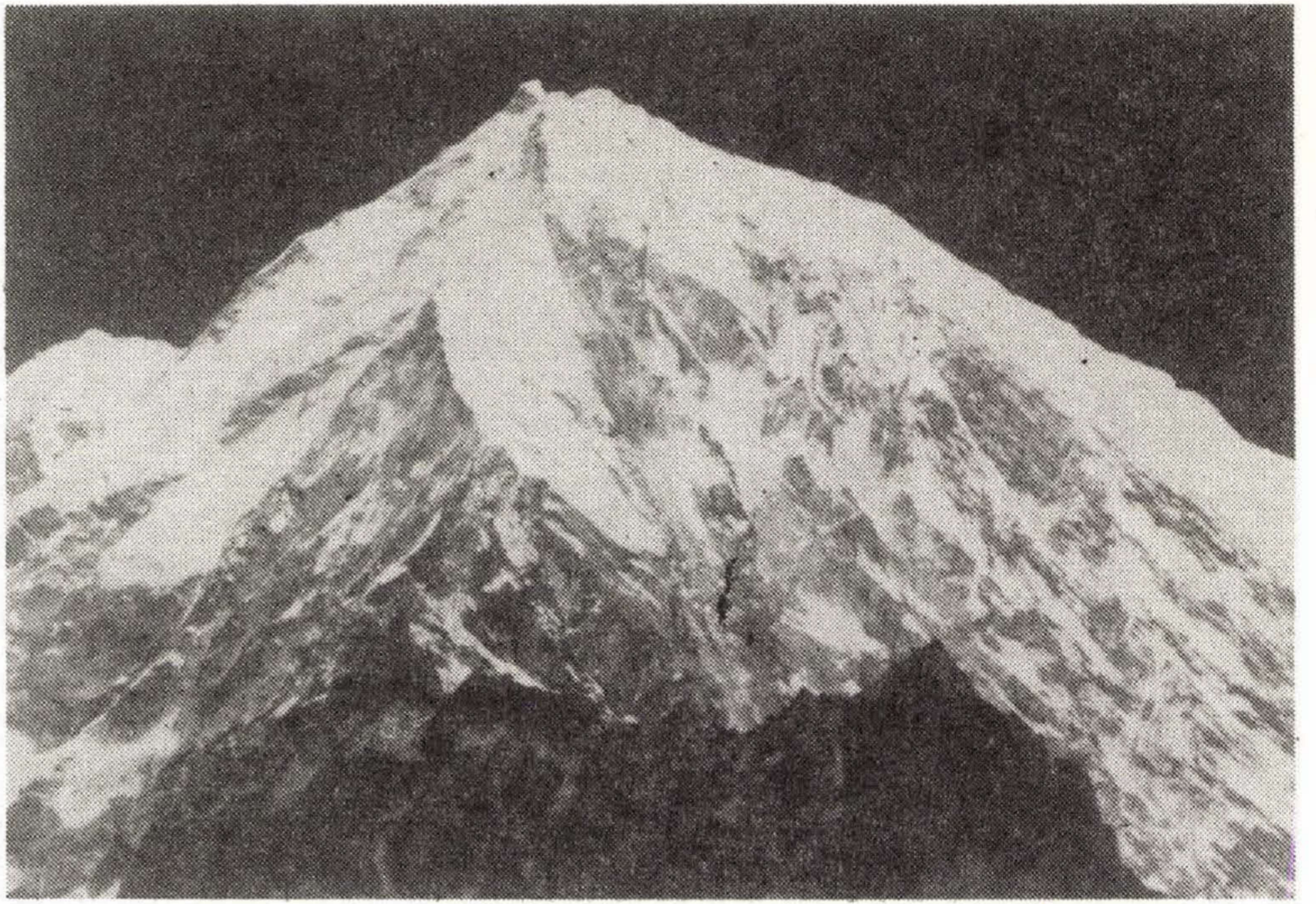
シャブルの部落をまっすぐ下り、尾根を二つ三つ巻いて、ランタン・コーラの底に下りる。ここでシャブルベンシからの道と出会うが、このへんのルートは、どの地図とも違っている。谷の主として左岸を遡行しつつ、十六時五分、ランタン・コーラ添いのバンブー・ロッジに着。深いブナ林に囲まれ小舎の側の竹林も見事だ。そここに流れる小川も心地よい。予定したラマ・ホテルまでは行けなかったが、先は長いのと、バンブー・ロッジの雰囲気あまりにもいいので、宿泊を決める。二人のシェルパはロッジに泊まるというが、私は、昨夜のこともあるので、テントを張り、下には落葉を敷きつめて、一人、快適な一夜を過ごす。

一月二十三日 快晴。すっかり天気はよくなった。相変わらずチャパティと紅茶の朝食をとって、七時半バンブー・ロッジを立つ。まだ生まれたばかりのチベット犬がじゃれついて、離れようとしなない。わが家のサモイエッド犬を想い出して、なつかしかった。

九時、ラマ・ホテル着。高度約三〇〇〇メートル。昨日の午後、シャブルから下ってランタン谷の底を遡行し始めてから、バンブー・ロッジを経由して、ラマ・ホテルまでは、あの通り

慣れた横尾から涸沢までの登山道とよく似ている。谷の轟音を聞きながら、深いブナ林のなかのよく踏まれた細道を辿る。右岸には、屏風岩に代わって、ランタン・リルン末端の側壁が迫っている。しかし、ここが穂高と違うのは、ラマ・ホテルから上に、六〇〇〇〜七〇〇〇メートル級の山々にとり囲まれた広大なU字谷が数十キロに亘って展開していることだ。そのふところは、広くて、深い。次の部落は、目の前に見えるのに、行けども行けども着かない。せいぜい三十分位と思うところが、二時間以上かかる。ゴラ・タベラ(三二〇〇メートル)、ランタン(三五〇〇メートル)を経て目的地のキヤンジュン・ゴンパ(三八一〇メートル)に着いた時には、十八時を過ぎていた。もう夜だった。

幸い天候はよく、一日中快晴で、ヒマラヤの鋭峰を真近に見ながら歩く気分は最高だった。とくに、ティルマンが「宝石のような山」と呼び、フルーテッド・ピークと名付けたガンチェンポ峰(六三九七メートル、未登峰)は、ゴラ・タベラを過ぎ、ランタン部落へ入る手前から、キヤンジュン・ゴンパに着くまで、その美しい山容とヒマラヤひだをこれでもか、これでもか、というように見せてくれ、飽きなかった。残照が消え去る直前の、まっ赤に燃えるガンチェンポの印象は強烈で、その時の写真を引延ばして今でも、部屋の隅に飾っている。



ガンジャ・ラへの途中から見たランタンリルン峰

はいるが、トレッカーのための特別なサービスは何もないと言ってよい。水洗便所もないし、電気もない。ベッドのある個室などあるわけもない。どの家も未だに一階は牛やヤクの住む場所だ。

村人たちは、外からの来訪者に対して寛大だし親切だ。しかし、先祖代々伝えられてきた自分たちの山村の生活を、侵入者のために変えるつもりは全くない。自然の摂理に従った。自然と一体の生活が頑固なまでに維持されている。ヒマラヤをかじったことのある私のような者には、それがうれしい。ヒマラヤの自然保護が叫ばれ、エベレスト街道の汚染が大きな問題になっているけれど、ランタン谷は、未だ大らかで、伸び伸びとした高山の生活がよく残っている。トレッカーは、ヒマラヤの美しい景観と一体になった彼らの生活に参加しながら、トレッキングを楽しめることは幸いだ。

ランタン谷の人々は、ソロ・クインプのシェルパ族と同じ系統のチベット系種族で、パサンやカジの話では、言葉は、必ずしもシェルパ語ではないが、お互いに会話は出来ると言う。「ナマステ」と挨拶しながら、重い荷を担いで部落間を移動する老若男女の村人たちに何人も出会ったが、彼らの生活・習慣は、何百年間に亘って全く変わっていない。今は、かなり多くのトレッカーが訪ねるようになったが、それでも、せいぜい年に一、二万人といったところである。トレッカーのための宿泊や飲食の施設が出来て

来ていたイスラエル人のトレッカーが、ガンジャ・ラ越えに同行させてくれと、しつこく頼んできたが、私自身としてはガンジャ・ラ越えは、ひとつの山行と考えて準備もしてきたので、直ちに断る。

高度の影響か、なかなか眠れない。外へ出ると満天の星空だ。ひとつひとつの星粒が途方もなく大きく、わっと一斉に落ち崩れてきそうに感じだ。ポーランドの民主化を称賛することから始まった夕食後の団欒は、イスラエルとアラブの戦争に及び、次第に激しくなる。核兵器をめぐって、フランス人とイスラエル人がお互いを攻撃しつつ、果てしのない口論を続けている。私はとでもつき合いきれず、座をはずし、寝袋にもぐり込んでしまった。あまりにも場違いな話題である。星空の下に青白く光るランタンの美しい山々の麓で、はじめて会った者同志が、お互いにカタキみたいにいがい合うこともないじゃないか、と思うが、世界中どこに行っても、背中に背負っている国籍を捨てることは出来ないし、厳しい現実から逃れられないのも事実だ。

この数週間後に、ネパールでも民主化を要求する大衆運動に火がつき、流血の惨事となり、四月に入って内閣が倒れ、三十年振りに複数政党が認められることになることなど、全く予想も出来ないことだった。

(いよいよガンジャ・ラ・越え。

次号をお楽しみに。)

会務報告

一、臨時評議員会

(一月十八日、養和クラブにて)

岩崎先輩他十名の評議員の方々に出席戴き、一橋大学山岳部の現状説明と今後について、活発な意見の交換が行なわれました。

二、新年会

(一月二十五日、如水会館にて)

三十名の諸先輩方の御出席を戴き、学生の紹介も交え、にぎやかな雰囲気の中、新年会が開催されました。

三、懇親山行

(五月十九日～二十日 増富鉱泉より瑞壇山往復)

参加者 佐々木誠・小林茂雄・松下順吉・樋口 洪・西牟田伸一・斉藤 誠・坪井(学生)・前神直樹

天候が心配されたが登るにつれ雲がどんどん

あがり、頂上では富士山・南アルプス・八ヶ岳からはるか北アルプスまでの眺望を楽しむことができました。

四、会員住所異動

林 正敏 S17年卒

〒一八一 三鷹市牟礼四一―一三一四一

☎〇四二二―四五―七七三八

須山 修平 S30年卒

〒三五九 所沢市東所沢一―一六一一五

☎〇四二九―四五―〇九五七

丸山 則二 S33年卒

〒一八〇 武蔵野市関前四一―一七

☎〇四二二―五四―七九五四

鈴木 博武 S33年卒

(勤務先) Rodete → Rockfe

宮武 幸久 S45年卒

〒四六五 名古屋市名東区一社三一三一

一社東団地二〇二一

☎〇五二―七〇四―一五一〇

(勤務先) 開発課→建材開発課

兵藤 元史 S52年卒

6C SPB Towers Jalan Batai,

Damansara Heights 50490 Kuala

Lumpur, MALAYSIA

浅田 充 S52年卒

〒二三二 横浜市南区別所中里台

二四―一―四一〇

☎〇四五―七四二―一七七〇

(勤務先) 第一原料部鉱石グループ→原料部金

属グループ

☎〇三一五九七―三六五五

井上 裕之 H2年卒(新会員)

〒〇六二 札幌市豊平区中の島一条二―一八

ファミール中の島四〇三

☎〇一一―八四一―一七九九

(勤務先) NHK 札幌放送局放送部

☎〇一一―二三二―四〇〇〇(代)

小野 一 H2年卒(新会員)

〒〇六二 札幌市豊平区平岸四条七―六一六

第三コーポしらとり二〇八

☎〇一一―八三二―九七六三

(勤務先) 北海学園大学 法学部 大学院

編集後記

遅れに遅れましたが、ようやく第七五号をお手元にお届けできることになりました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

今回は中島・中村両先輩より、ネパール及び中国トレッキング行の大作を投稿いただきました。なかなか得難い経験で、臨場感あふれる文章に魅了されました。

皆様も「ひと味違う」山行を経験された場合には是非とも前広に原稿をお寄せ願います。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

次号からは会報幹事の担当を

岡部晃和君 S58年卒

〒二〇六 多摩市豊ヶ丘三―三一五―一〇三

☎〇四二三―七三―七九二三

にお任せし、私は副担に回りますが、引き続きご寄稿の方よろしくお願い致します。

(近藤 泰)

